

ボランティアの組織行動とボランティア・マネジメント：参加動機と活動継続要因への注目

桜井 政成

ボランティア活動の活性化のためには、ボランティアの性質を理解し、それをより活かすことのできるボランティア・マネジメントの手法を開発することが求められている。本研究ではボランティアの組織行動、特にボランティアの参加動機と活動継続行動に着目し、その解明と、ボランティア・マネジメントの実践モデルへの適用を試みた。

まず第2章において、ボランティア活動に参加する人々の参加動機の構造を分析した。それぞれ、「自分探し」因子、「利他心」因子、「理念の実現」因子、「自己成長と技術習得・発揮」因子、「レクリエーション」因子、「社会適応」因子、「テーマや対象への共感」因子と名付けた。また、個人的属性やボランティア活動への参加形態による参加動機構造の差異についても分析した。その結果、年齢層、職業、過去の活動経験の有無、活動対象分野における類型ごとの参加動機構造の違いは、統計的にも経験的にも妥当性の高いものであった。このためこの7動機モデルの妥当性も十分なものであると考えられる。

第3章では、ボランティアの活動継続に影響を与える要因を検討した。検討した要因は、個人的要因、動機要因、状況への態度要因の3種類である。年齢層を区別しての分析結果では、状況への満足要因は高齢者層、壮年層、青年層の全ての年齢層で有意な関係が見られた。このため、わが国でも状況への態度要因がボランティアの活動継続へ重要な役割を果たしていることが確認された。また、年齢層によって、活動継続要因に差異が見られた。

第4章では、ボランティア受け入れ組織における、ボランティアの募集と活動維持の手法について分析するために、ボランティアを受け入れている組織に対する質的調査（半構造化インタビュー調査）を行った。この結果、ボランティアの募集において効果的であるのは、活動希望者の参加動機を刺激しやすい、口コミとイベントや講座参加者の勧誘であることがわかった。また、ボランティア参加希望者が活動をスタートさせるとここの段階で、ボランティア側の期待と、組織側の期待との調整がなされる必要があることがわかった（ボランティアのスクリーニングの必要性）。さらに、ボランティアの活動維持のためには、各組織が、ボランティアに無形の誘因を与えるための"見えざる"インセンティブ・システムを構築する必要があることが明らかとなった。ただし、いくつかの組織的要因によって、造られるインセンティブ・システムには違いが見られた。

本研究の政策的含意として次の3点を述べることができる。第1にボランティア活動の推進を行う政策担当者や推進機関は、ボランティアの参加動機構造の多様性について、理解する必要があることが言えよう。第2に、ボランティア推進機関やボランティア受け入れ組織では、募集したいボランティアの参加動機を理解し、それを誘引できる方法を取るべきであろう。また第3に、ボランティア活動の継続性に対して、ボランティアの個人的な要因（属性、理念の強さ、動機の種類など）がほとんど関係していなかったことは、いかにボランティア・マネジメントが重大であることを示していると言えるだろう。ボランティアの活動継続を促すために、それぞれの組織で、ボランティアを誘引し続けるための"見えざる"インセンティブ・システムを独自に構築していくことが求められる。